
京本 2 0 短編集

京本 2 0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

京本20短編集

【コード】

N2394K

【作者名】

京本20

【あらすじ】

短編のみ、全部、5〜10分で読み終わる・・・かな？

？

僕は重度の自閉症だった。

あまりの自閉症体質に僕の体は、外の世界の情報に耐えられなかった。

僕はパニックになると意識を失ってしまう。

僕は、この世界で生きていけなかった。

でも僕には、両親が居る。

僕は両親が大好きだった。

でも僕が6歳の時、障害者施設に預けられた。

それからというもの両親は、僕に会いに来てくれなかった。

「何で？」

僕は、この言葉を何処で覚えた判らない。

でも、僕はパニックになると何時も「何で？」を口癖にしていた。

毎日、毎日、何年も「何で？」を言い続けた。

そんなある日、施設にある学者がやってきた。

その学者は、僕の面倒を付きっ切りで見してくれた。

優しくかった。一緒にいると、安心した。

その学者がいてくれるとパニックが何時も収まった。

だけど、その学者は突然居なくなった。

その日は僕の誕生日だった。

いつもなら、学者が僕の為にいろいろ用意してくれるのだけど、

その日は、学者は来てくれなかった。

僕は、パニックした・・・

苦しくて、ずっと、ずっと、パニックしていた。

僕は、走った。

外へ出て何処とも無く走り続けた。

辿りついた場所に、両親が居た。

僕は、懐かしい気持ちになって、両親に抱きついた。

パニックが収まっていくのを感じた。

でも、両親は、僕を変人呼ばわりして、どこかえいってしまった。

僕の、パニックは止まらなくなった。

僕は、自分が制御できずに、その場で倒れこみ意識を失った。

気が付くと施設のベットのの上だった。

そこに、学者が居てくれた。

とても嬉しかった。

学者は「大丈夫か？」と連呼していた。

僕は、その日、もう一つの言葉「大丈夫か？」を覚えた。

その後、学者は僕を養子にした。

養子になった僕を、学者は献身的に支えてくれた。

学者「これはリンゴわかるかい？」

学者は、リンゴを取り出して見せた」

僕「何で？」

僕はパニックになった。

学者は、リンゴを引っ込めた。

学者「大丈夫」

僕「大丈夫」

僕は、なぜか、学者の大丈夫という言葉に安心した。

学者は、同じことを繰り返した。

すると、次第に、リンゴを取り出しても、僕は「何で？」という言葉を使わなくなっていった。

僕は、リンゴが現れも、怖くないと思うようになった。

学者は、いろんなアイテムで、同じことを繰り返した。

そうしているうちに、僕は、何を見ても「何で？」という言葉を使わなくなっていた。

気が付くと、僕のパニックは起きなくなっていた。

ある日、学者は、僕に、「歩く」という文字を見せた。

学者は、僕が歩いたたびに、その文字を見せ。

止まるたびに引っ込めた。

学者は、それを繰り返し僕に見せた。

気が付くと、僕は、「歩く」という文字が、歩くという意味になること気が付いた。

学者は、いろいろな文字を、使って、同じような事を繰り返した。

僕は、いつのまにか文字の意味が理解できるようになった。

ある日、学者は、僕に、本をくれた。

そこには、沢山の文字が並んでいた。

学者は、文字を組み合わせ、いろんな組み合わせを僕に見せた。

僕は、「何で？」と、言うと、

学者は僕を叱った。

僕はパニックになった。

けど、直ぐに学者は「大丈夫」といった。

「大丈夫」「大丈夫」

僕も「大丈夫」と言っつて、パニックは、直ぐに収まった。

学者は、いろんな文字の組み合わせで、繰り返し同じことをした。

僕も同じように、「何で？」を繰り返す。

学者も同じように、僕を叱り「大丈夫」を繰り返した。

そうしているうちに、意味の判る文字の組み合わせの時に、僕は「何で？」を言わなかった。

パニックが起こらなかった。

僕は、文字の組み合わせを、「一つの塊の一つの文字」として、意味を理解した。

その「一つの塊の一つの文字」を更に別の文字と組み合わせる「一つの塊の一つの文字」として理解した。

僕達二人は、それを5年続けた。

気が付くと、僕は「何で？」「大丈夫」を言わなくなった。

その代わりに本が読めるようになった、人並みに理解できるようになった。

僕は、人と言葉を交わせないけど、生活に困らなくなった。

。 退屈な時間が持てるようになり、その時間、本を読むようになった。

図書館に通いつめて、沢山読んだ。

僕は、そこで、手話という本を見つけた。

これなら、会話ができるかも……。

僕は期待して必死で勉強した。

。

僕は、手話を身に付けた。

障害者の施設の手話のできる人と沢山会話した。

とても楽しかった。

皆、口をパクパクしながら、音を出していた。

意味は判らないけど、……面白い、「何で？」

僕は、世の中の人と沢山、手話で会話した。

気が付くと、相手の口ぶりと言で、人の気持ちが理解できるようになった。

僕は、その口ぶりと言を参考に声を出す真似をした。

「大丈夫」きつと通じる。僕は勇気をふりしぼり声を出した。

不思議と通じているような気がした。

僕は、いろんな人に、話しかけた。

とても楽しかった。

気が付くと僕は、普通の人みたいに会話できるようになった。

そして僕は、いつの間にか、どこからみても普通の人になっていた。

?? (前書き)

テーマ

愚痴を書きながらも有名な役者になることを諦めない人の話

〈前書き〉

体操のお兄さんという表現は、ここでは、

<http://www.youtube.com/watch?v>

`|| osDspNeGgI4`

の動画の様な行為をする者のことである。

とか叫んでた・・・
何も大丈夫じゃねーよ！！！！
んなんな恥ずかしい腰振りダンスまでさせやがって・・・

拳句の果てに、メタボリックたぬきオヤジは・・・

「君は才能がある！！君は、この道で決まり！！」って言いいやがる始末である。

勝手に人の道を決めんじゃねー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

でも流石に、俺の環境適応能力はすごい物があると思った。

そういう意味で俺は努力家である自分を褒めたいと思う。

次こそ、この努力を実らせてドラマの役者の面接に受かってやる！！

10月30日

恥じらいを我慢し、俺は必死で、乳臭い仕事をしていたのだが、もう我慢ならない。

俺は、ドラマの役者の面接で言われた。

「君・・・体操のお兄さんでしょう。子供みすてて、役者になりたいの？」

「そんなイメージダウンするようなキャラを使うのは、家ではお断りんですけど・・・

俺は、今後悔している・・・

どうにもできない。

MHKの給料は高いから、一応、恩恵に授かっていたのだが、

この収入を途絶えさせない限り、役者の道が生まれないのである。

俺は、悩んだ末、バイトを掛け持ちすることにして、体操お兄さんさんを止める決意をした。

11月5日

今日は、体操お兄さんとして、最後の仕事の日である。色々嫌なこともあったけど、振り返ると悪いことだけではなかった気がする。

さて、今日は気合を入れて行くでしょう。

11月6日

昨日は、散々な目にあった。

ガキが親とはぐれてしまって、親を探すために局中が大忙しになった。

しかも、面倒なことにガキは俺に懐いてしまって、離れようとしていない。

ガキのおもりをする為に、2人きりなってしまったのだが、どうしていいか判らなかった。

体操のお兄さんの仕事は、体操するだけで、実際に子供と対話したりする訳じゃない。

元々、ガキ嫌いの俺にとっては、重苦しい時間に他ならなく、ガキごときに気を使ってしまっているのだからな。

泣いているガキを形式的に慰める訳だが、こんな冷めた扱いが通用するはずもなく、俺はオロオロするだけだった。

結局、俺は何一つまともなことはできなかった。

しかも自己嫌悪に陥っていたのである。

大の大人として実に情けない話である。

けれど、その地獄も開放された。

親御さんが見つかり、事件は一件落ち着いたのである。

その際、親は、何度も俺に礼を言ってくれた。

ガキも親に吊られて真似をするように礼をしていた。

俺は、なんだか、ちょっぴり嬉しくなった。。。

あれだけ嫌いだったガキが少しだけ好きになったような気がした。

俺の体操のお兄さんとしての仕事は、もう終わってしまったが、最後に良い体験をしたと思う。

もし、役者として成功できなかつたら、もう一度、体操のお兄さんとして雇ってもらえないかな？

今のうちにササクレ小次郎にゴマでもすっておこうかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2394k/>

京本20短編集

2010年10月13日16時50分発行